

【論文提出者】 社会文化科学研究科 人間・社会科学専攻
交渉紛争解決学領域
佐々木 千穂

【論文題目】
高次脳機能障害者の社会参加支援

【授与する学位の種類】 博士（学術）

【論文審査の結果の要旨】

佐々木千穂氏の論文「高次脳機能障害者の社会参加支援」は、全国に30万人以上いると報告されている、「見えない障害」と呼ばれる「高次脳機能障害」を持つ人々に関して、彼らのいわば目に見える部分の治療が終了した後の社会参加が、記憶障害、注意障害、遂行機能障害、社会的行動障害等が複雑に絡んで、非常に難しくなっている問題を取り上げ、社会参加を阻む根本原因は何かを明らかにした上で、その対策について考察しようとしたものである。

佐々木氏はまず、高次脳機能障害者がどのような社会生活上の困難を持つことになるのかを明らかにするために、高次脳機能障害の症状が日常生活においてどのようなものとして現れるのかを明確にしようとする。その際、これまでの取り組みでは特に認知機能障害に注意が向けられてきたこと、そして、認知機能の改善へ向けたアプローチの成功例も報告されるようになってきてはいるものの、社会参加が困難となる多くの事例においては、認知機能の改善へ向けた取り組みだけでは不十分であることを強調する。そして氏は、障害者の社会参加を阻害する最も重要な因子は、障害者における障害認識の低下であると主張するとともに、なぜそれが社会参加を阻害する重要因子となるのかについてその論拠を示そうとする。また氏は、過去に実施された高次脳機能障害者に関する全国実態調査の結果、並びに、氏自身が行った青森県の実態調査の結果等を踏まえて、障害者の社会参加を阻むもう一つの因子として、障害者に対する社会的認知及び社会啓発の問題があることを指摘する。

次に氏は、上記の考え方に基づいて、氏が最も重要な阻害因子とする、障害者における障害認識の改善方法として「グループ療法」が有効であることを、これまでに報告された臨床的実践事例及び氏自身が関わった臨床的実践事例の分析を通じて得られた知見をもとに立証しようとする。その際、障害者のアイデンティティの変化を含む心理社会的要素に配慮することが、特に重要であると主張する。また、高次脳機能障害者の社会的認知に関する対策としては、重要な環境要因である家族と協働して、本来の意味におけるリハビリテーション（社会復帰）を推し進めていくことが必要不可欠であると説く。その上で、「三重モデル」をはじめとする、国内外において過去に実施されたモデル事業の問題点を摘出して、改善案を提示しようとする。その際、家族、地域、職場を含む「包括的リハビリテーション」を実施するための連携システムを中核とするネットワーク作りの重要性を強調する。

氏は、高次脳機能障害者の社会参加支援における当事者に対するアプローチとしては、障害認識の改善が特に重要であること、そして、障害認識の改善に対処するためには、適切な仕方で自己認識を促すグループ療法が効果的であることを、現在の脳科学的アプローチに批判的な立場から、その理論的根拠を模索しながら、十分説得的に示している。また、障害者の社会参加を推進するには社会啓発が重要であることを強調し、社会啓発によって当事者をとりまく家族、地域、職場のあり方が変容することが必要であるとする。そしてそのためには、社会啓発を、医療・福祉・行政・教育各層が連携をとって推進していく必要があることを正しく主張している。

学位論文として適格であると判断する。

【最終試験の結果の要旨】

上記の者に関して、平成25年1月21日（18：00～19：30）、文法棟応接室において、口述試験を実施した。

また、上記の者は、同年1月27日（13：00～14：00）、全学教育棟E107教室において、学位論文について公開発表を行った。

その結果、上記の者は、提出された論文に関連する専門領域についてすぐれた学識を有し、自立して研究を行う能力が十分にあると判断され、審査委員会は、博士（学術）の学位を上記の者に授与するに値すると判定するに至った。

【審査委員会】

主査 岡部 勉
委員 高橋 隆雄
委員 田中 朋弘
委員 中川 輝彦
委員 積山 薫